

「巨人殺し」の(ユニオン)ジャック

—民衆ヒーローの暴力性に関する覚書—

佐藤和哉

はじめに

『ジャックと巨人たちの物語 (*The History of Jack and the Giants*)』、あるいは『巨人殺しのジャック (*Jack the Giant-Killer*)』(以下、『巨人殺し』)は、18世紀初頭にチャップブックとして出版され、広く英語圏で知られていた物語である。コーンウォールの若者ジャックが地元を荒らしていた巨人を皮切りに次々と巨人を倒し、無敵の剣や透明マントなどの魔法のアイテムを得てイングランドとウェールズを旅して巨人を退治していく、というストーリーで、民衆文化に出自を持つ物語としては珍しく、子ども向けの読み物として社会階層を横断して広く親しまれていた。たとえば、イギリスで商業的に成功した初期の児童書『小さなかわいいポケット本 (*A Little Pretty Pocket-Book*)』(1744年)には、著者の出版業者ジョン・ニューベリー(John Newbery, 1713–67)の中流階級志向がよく現れているが、この本の子ども向けの前書きは、「巨人殺しのジャック」が「トミー君とポリーちゃん」に宛てて書いたものであるという仕掛けがほどこされている(この仕掛けについては、佐藤「行商本」54–55参照)。

また、ウィリアム・ワーズワス(William Wordsworth, 1770–1850)が幼いころの読書体験を思い出すときにこの物語を挙げていることも、この物語が地理的にも時代的にも広く知られていたことの証左といえるだろう。次に掲げるのは、『序曲』の一節である。

あの魔法の帽子をもう一度私たちに与えて欲しい、
 フォルテナーテュスのあの帽子を。それから、透明マント、
 巨人殺しのジャックが持っていたあのマントを。ロビン・フッドや
 聖ジョージとともに森にいたセイブラももう一度。
 これらを愛する子どもは、間違いなく得るのだ。
 我を忘れて夢中になるという、あの貴重な体験を。(1850 ed. Book
 V, Lines 341–46)

『巨人殺し』は、このように 18 世紀を通じて広く読まれているものの、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて、その残酷性が指摘されるようになって修正を受ける。そして、『ジャックと豆の木 (*Jack and the Beanstalk*)』の影に隠れるように、現在の物語のコレクションではそれほど再話されることがなくなっている。¹ この物語についての研究としては、早くも 19 世紀中葉に、民話や伝承童謡についての研究で有名な J・O・ハリウエルが、北欧神話中に類似の話が見られることを指摘して (Halliwell 61)、その後の研究や紹介の多くはこれをもとにしている。ただし、後で見るように、この物語そのものの文献初出はあまり古いものではなく、この物語の起源を実証的に遡るのは難しい。オーピー夫妻は、『巨人殺し』のように「知恵を使って強大な敵を倒す」モチーフはより普遍的であると論じ、この物語が北欧と何らかの関連があることは認めながらも、文献初出の時期からしてこの物語の成立の時期が 18 世紀初頭であることを強調する (*Opie, Fairy Tales* 59–60)。この物語については、上述のように、ハリウエルに従ってこの物語を北欧起源であるとしてそれで事足りりとしている文献が多い。後で紹介するように、英語圏では、この物語の成立に関して、アーサー王伝説の研究者が興味深い論考を発表しているが、日本語ではこの物語についての研究はそもそも非常に少ないし、あっても、その紹介や研究には、いずれも見るべきものはない。

本稿は、以上のように、かつては確実に広くイギリスで親しまれていながらも、本格的に論じられることのあまりなかった物語を取り上げて、そ

のテキストを詳しく見ていく。『巨人殺し』は、「正義のヒーロー」ジャックが「悪」の象徴とも言える巨人たちを倒していく典型的なヒーロー物だが、ジャックが体現しているはずの「正義」の正当性やその執行の様態にはどのような特徴が見られるのだろうか。以下では、とくに「巨人殺し」につきものの暴力性、物語中でくり返し強調されるアーサー王の役割、それに物語に見え隠れするウェールズ的要素に焦点を当てて、それらを18世紀というコンテキストのなかで論じることとする。

物語の紹介

先にも簡単に触れたように、巨人殺しのジャックは17世紀以前には全く姿を見せない。ウォリックのガイ、親指トム、ロビン・フッドやのっぼのメグなどチャップブックの数多くの登場人物が、16世紀、場合によってはそれ以前からさまざまな形で登場しているのとは異なり、17世紀までは、印刷出版業者のカタログにも、この時代の民衆本を集めたコレクションにも見ることはできない(17世紀のチャップブックを広範に論じたスパフォードの研究でも、この本は扱われていない(Spufford))。現在までの調査で分かっている『巨人殺し』の文献初出は、1708年の『ザ・ウィークリ・コメディ』という雑誌における広告である(Opie, *Fairy Tales* 61)。ここから、『巨人殺し』は民間伝承のなかで自然発生的に出来上がってきた物語であるというよりは、誰だかは分からないが、ある著作者によって、この時期に創作あるいは編集されたと考えるほうが自然だろう。ただし、すでに19世紀来指摘されているように、個々のエピソードには、北欧神話やヨーロッパのほかの民話に似たようなモチーフを見いだすことができる。

以下、内容の紹介と検討はオービーの挙げているシュルーズベリのエドゥズという印刷出版業者の版によるが、若干の語句の違いといくつかの段落の相違はあるものの、筆者が見たほかの版(例えば、当時のロンドンにおける大手チャップブック出版業者ダイシーによるもの)と実質的な異同はない。なお、製本技術の上で、あるいは行商の必要上、1冊が24ページ

以内（長くて32ページ）でなければならないという制約のあるチャップブックにはよくあることだが、物語が長いために、第一部、第二部がそれぞれ別の冊子になっている。以下、便宜上エピソードに番号をつけながら内容を略述する。

- 1) ジャックの子ども時代の紹介。牧師を頓知で言い負かす。
- 2) コーンウォールのセイント・マイケルズ・マウントに住む巨人を落とし穴に落として殺し、「巨人殺しのジャック」と呼ばれるようになる。
- 3) 別の巨人に捕まるが、城の窓から垂らしたロープで巨人の首を絞めて殺し、囚われになっていた女性たちを助ける。
- 4) ウェールズの巨人に寝込みを襲われるが部屋の隅に隠れて攻撃を逃れ、朝になってその巨人と大食を競い、服の下に仕込んだ革袋を目の前で裂いてみせて挑発したので、巨人も同様に腹を裂いて死ぬ。
- 5) アーサー王の息子の従者となり、その路銀を確保するために付近に住む「三つ頭の巨人」をだまして幽閉したうえ、無敵の剣、透明マント、早駆けの靴、知恵の帽子を手に入れる。
- 6) 王の息子が求婚していた乙女に取り憑いていた悪魔を殺して魔法を解き、二人を結婚させる。これらの功績によって「円卓の騎士」に叙せられる。

(以上、第一部)

- 7) ジャックは王国内の巨人たちを根絶やしにすることを誓い、アーサー王と円卓の騎士に暇乞いをして巨人退治の旅に出る。
- 8) 森のなかで巨人に捕われた騎士とその妻を救い、その巨人とその兄弟を殺す。
- 9) この巨人たちの住処に囚われていた人びとを解放する。

- 10) 祝宴のなか、別の巨人が復讐のために向かっているという連絡が入る。ジャックは集まっている人びとの目の前で見せ物にしながら、その巨人を殺す。
- 11) さらに旅に出て、ある隠者から魔法の城で石にされている多くの人びとと、そこを守っている巨人のことを聞き、魔法使いと巨人を倒して人びとを解放する。
- 12) ある公爵の娘がここに捕われていて、感謝された公爵からその娘を妻に与えられ、さらにアーサー王から所領を下されて、そこで幸せに暮らす。

(以上、第二部)

暴力の様態における変化——知恵から力へ

前述のように、この物語は、口承で伝えられたものではなく、さまざまな巨人退治のエピソードを不詳の作者が綴り合わせたものだと考えてまず間違いないだろう。そこで問題となるのは個々のエピソードの選択と配列である。エピソード1は富農の息子ジャックが七歳のときのこととして語られ、牛の番をしていたジャックに牧師が「聖書の戒律はいくつあるか」と尋ね、「九つだよ」と答えたのを咎めると、「でも牧師さんはメイドのマージェリーと戒律を一つ破っているじゃないか」と言い返す。さらにジャックが自分も質問をしてよいかといい、「この牛たちを作ったのは誰だい」と尋ねるので牧師が、ここぞとばかりに「全能の神様だ」と答えるが、「いや、雄牛をお作りになったのは神様だろうけど、雄牛を去勢牛にしたのはうちの父ちゃんと作男のホブソンだ」と言って牧師を言い負かす。

七歳の子どもにしてはませた発言だが、その早熟ぶりも含めてジャックの「賢さ」だということだろう。聖職者の性的な放縦が笑いの対象となるのはチャップブック(を含むポピュラーカルチャー)では珍しいことではない。このエピソードは、「子どもが聖職者(やそのほかの社会的上位者)に頓知や機知で勝つ」というものだが、一見したところ、巨人退治との関連

はほとんどないように思われる。しかし、このエピソードに入る前に、ジャックは「きびきびした、活発でいつでも発揮できる機知の持ち主」であり、「力で達成できない場合は、それが何であれ、たぐいまれな機知と策略でやってのけた」ことが書かれていて、「だからジャックを負かすことのできる者がいるとは、だれも聞いたことがなかった」(Opie, *Fairy Tales* 64)とつながることに注意したい。つまり、この物語の「語り手」は、ジャックは力で劣ることがあるかもしれないが、知恵がそれを補っている、と言っている。少なくともその始まりにおいて、この物語が「知恵のある者が自分よりも大きな(優位にある)者を倒す」ことをモチーフとしていたことを確認しておきたい。

しかし、「三つ頭の巨人」から魔法のアイテムを手に入れる前と後とは、ジャックの巨人との戦いかた、暴力の行使のしかたは、まったくと言ってよいほど異なる。物語の前半では、ジャックはエピソード1から予想されるように、おもに知恵で勝負する。最初に退治する巨人は落とし穴を掘ってそこに落とし込み、脳天につるはしを食らわせているし(エピソード2)、次の巨人たちは、結び目を作ったロープを2階から首にかけ、梁に吊るして倒している(エピソード3)。また、その次の巨人は、親切ごかしにジャックを家に泊めてくれるが、ジャックは、巨人が寝首をかこうと棍棒で殴りに来るのを部屋の隅に縮こまって避けたあと、朝食で粥の大食勝負をして、腹に仕込んでおいた革袋を裂いてみせるのを巨人が真似して自分の腹を裂き、絶命することになっている(エピソード4)。これらは、たとえばグリム童話の「勇敢なちびの仕立屋」やペロー童話の「親指小僧」にも出て来るような、力で劣る主人公が知恵をふるって巨人を倒すストーリーである。

しかし、物語の中ごろ、第一部の後半で無敵の剣、透明マント、早駆けの靴、知恵の帽子といったアイテムを得たあとは、ジャックは圧倒的な暴力で巨人を殺すようになり、しかも惨殺と言ってもよいような殺しかたで屠る。騎士とその妻を捕まえていた巨人には、透明マントを着て近づくと「膝のちょうど下のあたりで両脚を切り落とし」、ジャックは倒れた巨人の

首を踏みつけて「お前の悪行の正当なる報い」を与えてやると言う、巨人を剣で突き刺して殺す。また、その兄弟を殺すときも、頭を狙うも腕が届かず鼻を切り落としてしまううえに、

ジャックは、巨人の尻に剣を柄まで突き刺すとしばらくそのままにしておいて、巨人が尻の穴に剣を刺したままで踊り回りながら、「内蔵がきりきり痛んで死にそうだ、死にそうだ」と叫ぶのを、腰に腕をあてて笑って見ていた。1時間かそれ以上もこのように騒ぎ回っていたが、そのうち、ついに巨人は死んで倒れてしまった。(Opie, *Fairy Tales* 76)

というように巨人をことさらにいたぶっている描写もある(エピソード8)。とくに肛門への言及は、ホモエロティックなレイプさえ連想させる。その後も、衆人環視のなかで巨人を倒すために、わざわざ透明マントを脱ぎ捨てて早駆けの靴で巨人から逃げ回ってみせて、最後には、あらかじめ落ちやすくしておいた橋を渡らせて濠に落とし、水のなかでのたうち回る巨人を嘲りながら首にロープをかけて馬で引きずり出し、最後に首を落とす(エピソード10)。

このように並べてみると、おもにジャックの立場に立って応援する「語り」によって見えにくくなってはいるものの、敵が悪の限りを尽くす巨人であることに免罪符を得て、「ヒーロー」であるはずのジャックもまた残虐行為の限りを尽くしていることに気づかされる。敵を「必ず」切り倒す剣と、敵から「必ず」逃げおこせる靴、さらには姿を隠すマントも持っているジャックは、どれほど強大な敵にも負けるはずがない。前半の「力なきものが知恵で自分より強いものに立ち向かう」物語の性格とは異なり、魔法のアイテムを得たあとのジャックは、実は「弱いものいじめ」をしている。それから、後半には「知りたいことを何でも教えてくれる帽子」、いわゆる「知恵の帽子」がまったく言及されていないことにも注意しておきたい。ここで必要とされるのは「知恵」ではなく「力」なのだ。

正確には、エピソード6でジャックが魔法のアイテムを用いて殺すのは悪魔ルシファーで、そこでは、例の剣で「悪魔の首を落とし」てはいるが、

いともあっさり殺しているために、暴力的な印象は与えない。むしろ、アーサー王の息子を助けるために、各種魔法のアイテムを駆使して難題に立ち向かう姿は、「暴力的な力」よりは「知恵」を振るうヒーローとしての色彩が強いと言える。したがって、ジャックの暴力性は第二部においてより顕著である、と言い換えてもほぼ間違いではないだろう。

アーサー王の権威

このように圧倒的な暴力性を途中から増してくるもののほかにも、この物語の第一部と第二部の間に顕著な違いが二点ある。第一に、物語の語り手は、全体を通じて「アーサー王」に繰り返し言及しているが、その存在感がとくに強く意識されるのは第二部であること、第二にウェールズ、コーンウォールといった西側のケルティック・フリンジが第一部ではとくにクローズアップされているのだが、それは第二部の冒頭までのことであって、第二部が進むにつれてほとんど無視されるようになってくる、という点である。

物語の冒頭で時代と場所が設定される。「アーサー王の御代に、イングランドのランズ・エンドの近く、つまりコーンウォール州に裕福な農夫が住んでいて、一人息子がいたが、この息子はみんなには『巨人殺しのジャック』で通っていた」(Opie, *Fairy Tales* 64) とされ、「アーサー王」の時代、そして、西方のコーンウォール(アーサー王に縁の土地である)——ただし、ここは「イングランド」であることが明記される——においてこの〈歴史＝物語〉が展開することが示される。

アーサー王伝説の研究者、トマス・グリーンは、『巨人殺し』の物語にアーサー王は不可欠とは言えないにせよ、物語全体を通してその存在が確かに感じられる」と述べている(Green 2)。「アーサー王の治世」への言及が、ほかの多くの物語において単に「昔むかし」の言い換えであるのとは異なり、王の息子が登場したり、ジャックが円卓の騎士に叙されたりするほか、ジャックは第二部では巨人を倒すたびにその首を王に送っている。

グリーンはさらに、ジャックと巨人の戦いが、いろいろなアーサー王伝説のなかのアーサーと巨人の対決のシーンと類似していることを指摘し、『巨人殺し』を書いた(あるいは編んだ)作家は、アーサー王伝説に依拠していたのではないかと論じている(2)。

第一部の最後で円卓の騎士となったジャックは、第二部冒頭で、新しい冒険を求めて旅に出るときに王にこう告げる。

この王国の辺鄙な地方やウェールズの領土には、いまだに多くの巨人どもがはびこっており、陛下の忠実なる臣民に筆舌に尽くしがたいほどの害を与えています。もしも陛下がお認め下さいますならば、またたくまに、この怪物どもを根絶やしにして、この国に、猛々しい巨人どもや人に敵なす怪物どもが一匹たりとも残らぬように退治してみせましょう。(Opie, *Fairy Tales* 72)

第一部でのジャックは、自分の住むコーンウォール一帯を荒し回る巨人を倒したり(エピソード2)、その復讐のために自分を捕まえた巨人を殺したりするなど(エピソード3、4)、地域共同体の治安と自己防衛のために戦うのだが、第一部の後半で魔法のアイテムを得たあとの第二部におけるジャックの巨人退治は、アーサー王という王権によって正当性を与えられた虐殺——前述のように、ここでのジャックにとっては自分が必ず勝って相手を殺せることが確実な戦いなのだから——だと言える。また、ジャックが巨人を倒すたびに、王のもとへ巨人の首を送り届けることが必ず語られているところからも、ジャックの行動に対して、アーサー王が封建的主従関係において承認を与えていることは明らかである。物語の語り手は、古代の偉大なイングランド王とされ、さまざまな巨人伝説と結びつけられてもいたアーサー王にそれだけの権威を認めていた。ここでのジャックは、王の権威によって行動のさらなる正当性が認められた、体制側のヒーローだと言える。

近代、とくに19世紀におけるアーサー王の受容について論じたパーチェフスキーによれば、17世紀末にはアーサー王をウィリアム三世になぞらえ

た叙事詩が書かれており、アーサー王は、18世紀という対外戦争の相次ぐ時代に、ナショナル・アイデンティティを国民の間に強固に確立させるうえで大きな役割を果たしたということである(24–28)。アーサー王を称揚する傾向は、1756年に始まる七年戦争以降、世紀後半により顕著になるとバーチェフスキーは述べているが、『巨人殺し』の文献初出である18世紀前半は、17世紀末のファルツ継承戦争やスペイン継承戦争への参戦、スコットランドとイングランドとの合邦など、ナショナリズムが高揚する条件は整っていた。高揚するナショナリズムは多くの場合、太古にそのアイデンティティの核を求めようとする。ジャックに「巨人を皆殺しにする」権限を付与するのが伝説の偉王アーサーであるのは、とても自然なことだったと推察される。

ウェールズという異郷

前節で確認した引用部分には、次の論点、すなわちウェールズに対する語り手の態度の問題も見取ることができる。ここでジャックは、「この王国」と「ウェールズの領土 (the dominions of Wales)」を分けて語っており、現実での政治的な一体性はともあれ、物語中では、イングランドとウェールズは別の地域であると認識されている。前述のように、コーンウォールは飽くまで「イングランド」であり、ここでいう「この王国」はイングランドだとされている。18世紀初頭のウェールズは、農牧業を中心とした閑散とした農村地域で、イングランドとの交流も活発ではなかった (Porter 35–36)。イングランドから見たウェールズが、「辺境の地」と認識されていたとしても不思議ではない。

また、一般にチャップブックではウェールズは激しい蔑視の対象になることが多い。ウェールズ人は常に「愚かな田舎者」として描かれ、『貧しさに苦しむウェールズ人』という徹頭徹尾ウェールズ人を馬鹿にしていじめ抜く物語や、『タフィーのロンドン歷程』といったナンセンス話(「1月33日に手押し車に乗ってタフィーはロンドンへ向かう」などのフレーズが見

られる) (Ashton 476) のように、理屈も何も分からず、知的にも道徳的にも『貧しさに...』の主人公は飢えのためとは言え、盗みを繰り返す) 劣る存在として表象される。イングランド人は、一般にウェールズを見下していたと言っても過言ではない (Langford 324)。

「タフィーはウェールズ人、タフィーは泥棒」という文句で始まるナーサリー・ライムズの文献初出は1780年ごろであり、オーピーはさらに、1744年出版と推定される『親指トミーのかわいい歌の本』という童謡集のなかに、

タフィーは産まれた
びっかぴかの月夜に
頭は鍋の中
踵は天井向いて

という唄があることを紹介している。また、ピープスの日記にも、ロンドンで首をつるされたウェールズ人の絵に関する言及があることも例に出して、17世紀から18世紀にかけて、イングランドでウェールズ人が一般的に嘲りやからかいの対象になっていたことを述べている (Opie, *Nursery Rhymes* 477)。

『巨人殺し』におけるウェールズも、単に辺鄙な田舎ではない。ジャックを家に招いて泊めてやり、寝入ったところを叩きつぶそうとした巨人(上記「エピソード4」)について、この物語は、「二つ頭の巨人が家から出て来たが、これまで倒した二人ほど猛々しくは見えなかった。というのも、こいつはウェールズの巨人だったので、やることなすこと密かにこっそりと悪意を持って行るのが常で、見せかけだけは友だち面をするのだった」 (Opie, *Fairy Tales* 68) と語り、巨人が狡猾である理由が「ウェールズの巨人」だからだと説明している。つまりウェールズはことさらに悪意のある者の住処として表象される。しかも、「密かにこっそりと悪意をもって」ことを行わずのこの巨人は、あっさりジャックの挑発によって自分の腹を

裂いて絶命するほど愚かでもある。多くのチャップブックが描く「ウェールズ人」の特性をウェールズの巨人も共有している。ここでもウェールズはたしかに蔑視の対象となっている。

そもそも物語のなかで、ウェールズへの言及はやや唐突である。初めての巨人退治のあと、別の巨人がジャックに復讐を試みる。その巨人が城を持つ森にジャックはたどり着いてしまうのだが、それは、「ウェールズへの旅」の途中であった、とされるのが、この物語におけるウェールズが言及される初めての箇所である (Opie, *Fairy Tales* 66)。そして、「巨人殺し」と呼ばれることになったジャックがウェールズに向かう理由は語られない。それは自明であり当然であるとされているからだ。すなわち、ウェールズは巨人の棲む国、魑魅魍魎の跋扈する国として語られている。

チャップブックは印刷というメディアを通じて、ポピュラー文化をナショナルな文化へとつなげる契機となりえた。ほかのところで簡単に触れたように、チャップブックのタイトルに頻出する地名は、「イギリスのどこか」として人びとに馴染み深いものとされていた (佐藤「共感の行方」100)。「想像の共同体」を持ち出すまでもなく、チャップブックに触れる人びとは、「ウォリックの」ガイ、「ウエストミンスター」のメグ、「ヨーク」の船乗りロビンソン・クルーソーらを通じて「国土」を意識することとなった。

同様に、この物語はウェールズをこのように表象することによって、それと比べて、政治的・社会構造的・産業的・文化的に、より「進んだ」イングランドという自分たちの属する共同体を定義づけることとなった。また、チャップブックにおける国土のさまざまな地名の言及に慣れていたチャップブックの読者が、このように描かれるウェールズにある種のリアリティを感じていたと想像するのはそれほど的外れではないだろう。

ただし、第二部の冒頭でウェールズから巨人を根絶やしにすることを誓って旅に出たジャックではあるが、その大義は次第に忘れ去られる。最後の巨人退治のあと、ジャックは所領と妻を王から授かり、幸せに暮らすという大団円を迎える。しかし、その戦いでイングランドおよびウェールズが

ら巨人がいなくなった、とか、これが最後の一人であった、とかいう記述はない。もっとも、そもそもチャップブックでは、話のつじつまが合わなかったり、前後で矛盾したりすることは決して珍しくないので、巨人の全滅をもくろんで旅に出たジャックがそれを成し遂げたかどうかが語られないとしても、そういう矛盾、あるいは語りの不手際は、とりたててこの物語の特徴的な点ではない。

しかし、先に確認したように、これは、ある作者が「巨人殺しのジャック」というキャラクターを作り上げて(あるいはすでにあるものを特別にキャラクターとして立てて)、その冒険を描くために、各種の民話を合成してこしらえた物語である。それだけに、作者の意図はともかく、第二部においてウェールズが語り手によって事実上忘却されることには一定程度の意味があるのではないだろうか。つまり、いったんは「イングランド」と別のものとして意識された「ウェールズ」は、アーサー王の付与した権威の下で巨人を根絶やしにすることを許されたジャックについての「語り」のなかで、巨人が駆逐されなければならないエリアとしてイングランドと同化され、別個の存在意義を失い、物語のなかで殊更に別の領域として言及されることをやめるようになるのではないか。矛盾するようではあるが、巨人がいることによって特徴づけられていたはずのウェールズは、ジャックの巨人殺しのツアーによって、むしろイングランドと同様に、巨人の存在がゆるされない「文明化」されるべき土地となっている。

ここまでの議論をまとめよう。自らの地域共同体や自身の安全を脅かす暴力に知恵で立ち向かう主人公は、ジャックが魔法のアイテムを得たときを境として、無敵のアイテムを駆使して巨人を虐殺して回るようになる。この暴力の行使はアーサー王という権威によって正当化されたものであり、かつ「イングランド王」の権威の強調のもと、物語の当初に濃厚であった「コーンウォール」や「ウェールズ」といった地方色は薄められていく。

すでに何度か触れたように、この物語は既存の巨人退治のエピソードを、不詳の作家がつなぎ合わせたものである。したがって、物語の一貫性や合

理性を問題にするのであれば、単にこの作家の腕があまりよくなかった、というだけのこともかもしれない。しかし、テキストの内部で起こったこのような変化は、近代以降のイギリスを象徴的に表しているとも言える。その点を最後に見ておこう。

暴力・支配・国家

物語のなかで、ジャックが「自分よりも強い敵に知恵で立ち向かう」タイプから「圧倒的な力で敵を叩きのめす」タイプのヒーローになっていくことは、18世紀以降の国際関係のなかでイギリスが進んでいく道りを考えるうえで示唆に富んでいる。

上でも簡単に触れたが、あらためて指摘するまでもなく、18世紀はイングランドにとって戦争の世紀である。1701年から13年までのスペイン継承戦争、その後、いわゆる「ウォルポールの平和」の20年余のあとは、1739年にスペインとの戦争を開始し、1740年から48年にかけてのオーストリア継承戦争、50年代半ばから63年にかけては、新大陸とヨーロッパでのフレンチ＝インディアン戦争と七年戦争と続く。そして、1775年に始まるアメリカ独立戦争が一応の収束を見るのが83年である。また、ブリテン島内部においても、1715年、45年の2回のジャコバイトの乱が起こり、とくに45年の乱の鎮圧は熾烈を極め、スコットランド、とくにその高地地方のありかたを一変させるにいたった (Porter 35)。1707年の合邦によって誕生した「連合王国」の辿った道は、決して平坦ではなかった。

一方、暴力がこの物語に特有の現象ではないことも自明である。チャップブックの世界で、ヒーローはほとんど常に暴力を振るうものであり、敵の血を流し、腕や頭や脚を切り飛ばすのは、雄々しいこととされる。民間伝承の常として、頓知者が社会的強者に勝つ話もあることにはあるが、物理的な力の行使の物語のほうが多い、少なくとも当時の読者の回想録により多く登場することは確かである (Simons 13)。さらに言えば、18世紀という時代において死刑の執行や鞭打ちが公開であったことに端的に示され

るように、この時代の人びとの感受性は、暴力に対して私たちの想像を絶するほど寛容であった。したがって、ジャックのようなヒーローがことさらに暴力的だと主張してもあまり意味がない。

それでもなお、問題にしておかなければならないのは、ここで示したような一連の戦争がまさに国家的な「暴力」の発露にほかならないという点である。独立戦争に破れてアメリカの独立を認めざるを得なくなるまで、連合王国はフランス、スペインといった大陸諸国との戦いにおいて全戦全勝であった。その姿はまさに「無敵の剣」を振るうジャックの姿と重なる。古の王の権威によって正統性を付与された、異郷よりも「良い国」である「我々の国」のヒーローは、「知恵のある弱者」から「圧倒的な力を持つ強者」へと変容し、異郷も併せた「我々の国」を浄化していく。この変容は、17世紀まではヨーロッパの一弱国であったイングランド＝連合王国が（この国が「知恵のある弱者」であったかどうかは別の議論が必要かもしれないが）、18世紀、あるいはそれ以降に「世界に冠たる大英帝国」への道を進んでいくことのアレゴリーとして見ることはできないのではないだろうか。

終わりに

現在の知名度としては豆のつるを上っていくジャックに及ばないにせよ、19世紀初頭の「改革の時代」を経て人びとの感受性が変化した後も、表現を和らげながらも「巨人殺し」のジャックは民話集に収められ続けた。ただし、その過程で、巨人の暴虐さはより強調され、ジャックの「暴力」はより正当化され、節度を備えた「力の行使」となっていく。この過程の検討は別な機会に行わなければならないが、見通しとしては、拡大しつづけるイギリス帝国がその支配を正当化していくのと同じロジック、すなわち「イギリス／植民地」＝「文明／野蛮」＝「正義／悪」＝「光／闇」といった一連の二項対立がそこに表れるのではないかと考えられる。

この二元論的善／悪のイデオロギーに支えられた19世紀の再話のなかで、巨人たちはこれまでも増して闇の異郷に潜む暴虐な「悪」となり、

一方ジャックはますます光り輝く「正義の味方」として、あらたに正統性を付与された暴力を行使しつづけることになる。こうして、「巨人殺し」のジャックは「ユニオン・ジャック」を振りつづけるのだ。「猛々しい巨人どもや人に敵なす怪物どもが一匹たりとも残らぬように」なる日まで。それが、かの国においてのみならず、密林であろうとも砂漠であろうとも。

註

1 日本では、石井桃子が訳した『イギリスとアイルランドの昔話』(1959年; 1981年改訳; 福音館文庫、2002年)のなかに、ジェイコブズによる再話にもとづいた「巨人たいじのジャック」として訳出されているものが比較的入手しやすいが、ほとんど翻訳としては唯一のものである。1991年に岩波文庫から出された『イギリス民話集』(河野一郎訳)も、ジェイコブズの再話を中心に編まれたものであるが、この物語は収録していない。ただし、ジェイコブズの再話は19世紀のものであり、チャップブック版とはいろいろな点、とくに本稿で問題にしたジャックの残酷さについてはその描写や行動そのものが異なるので、石井訳にも本稿での議論と合致しない部分がある

引用文献

- Ashton, John. *Chap-Books in the Eighteenth Century*. London, 1882. Print.
- Barczewski, Stephanie L. *Myth and National Identity in Nineteenth-Century Britain: The Legends of King Arthur and Robin Hood*. Oxford: Oxford UP, 2000. (野崎嘉信・山本洋訳『大英帝国の伝説: アーサー王とロビン・フッド』法政大学出版局、2005年) Print.
- Green, Thomas. "Jack & Arthur: An Introduction to Jack the Giant-Killer." *The Arthuriad*. Vol. 1. 2007. 1-4. Web. 7 June, 2009.
- Halliwell, James Orchard. *Popular Rhymes and Nursery Tales*. London, 1849. Print.
- Langford, Paul. *A Polite and Commercial People: England 1727-1783*. Oxford: Oxford UP, 1989. Print.
- Newbery, John. *A Little Pretty Pocket-Book*. London, 1744. Print.
- Opie, Iona and Peter. *The Classic Fairy Tales*. 1980. London: Paladin, 1984. Print.
- . *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*. 1951. 2nd. ed. Oxford: Oxford UP, 1997. Print.
- Porter, Roy. *English Society in the Eighteenth Century*. 1982. Harmondsworth: Penguin, 1990. Print.
- 佐藤和哉「共感の行方: 書きかえられる『ロビンソン・クルーソー』」見市雅俊編著『近代イギリスを読む: 文学の語りと歴史の語り』法政大学出版局、2011年、

71–112. Print.

同 「行商本と絵本の世界」三神和子・川端康雄編『絵本が語りかけるもの—ピーターラビットは時空を超えて』松柏社、2004年、41–61. Print.

Simons, John. “Introduction”. *Guy of Warwick and Other Chapbook Romances: Six Tales from the Popular Literature of Pre-Industrial England*. Ed. John Simons. Exeter: U of Exeter P., 1998. 1–45. Print.

Spufford, Margaret. *Small Books and Pleasant Histories — Popular Fiction and Its Readership in Seventeenth-Century England*. Cambridge: Cambridge UP, 1985. Print.

Wordsworth, William. *The Prelude, 1799, 1805, 1850*. Ed. Jonathan Wordsworth, M. H. Abrams, and Stephen Gill. A Norton Critical Edition. New York and London: W. W. Norton, 1979. Print.